# とうきょう すくわくプログラム活動報告書

## １．活動のテーマ

＜テーマ＞

**「音楽で育む幼児の想像力」**

＜テーマの設定理由＞

日常の保育の中で、子どもたちは歌や手遊び、リズムに合わせて体を動かすことを楽しんでおり、自然と音やリズムに興味・関心を持つ姿が多く見られた。また、鍵盤ハーモニカや打楽器を使う活動では「いっしょに音を出したい」「同じリズムでたたけた！」といった友達と音を合わせる喜びや達成感を感じている様子が見られる。こうした子どもたちの姿から、幼児期における音楽体験（楽器を使ったリズム遊びや歌を通じた表現活動）を通して、感覚や情緒、リズム感や身体表現の発達をより豊かに育みたいと考えた。
グループでの音楽活動を通して、他者と協力しながら表現する楽しさを味わい、協調性の発達につなげたいと考えている。さらに、合奏や発表会などの経験を通じて、練習を重ねて上達する喜びや集中して取り組む力を育み、大勢の前で発表することで達成感や自己肯定感を感じられるようにしたいと考え、このテーマを設定した。

## ２．活動スケジュール

令和７年４月～令和８年３月
・月１～２回のリード合奏教室（音楽専門講師指導）　・日々のリード練習
・保育終了後の職員向け音楽指導講義
・２月：大ホールでの音楽発表会（合唱・合奏の披露）

## ３．探究活動の実践

＜活動の内容＞
・活動のために準備した素材や道具、環境の設定
・活動中の子供の姿・声、子供同士や教諭との関わり　等を記載ください。

**活動のために準備した素材や道具、環境の設定**
子どもたちが音やリズムに主体的に関わり、試行錯誤しながら表現を深めていけるよう、環境構成を意図的に行った。
具体的には、鍵盤ハーモニカを中心に、タンバリン・カスタネット・太鼓・小太鼓・ラテン楽器等の多様な打楽器を用意し、それぞれの音色や特徴の違いを体感できるようにした。さらに、音の強弱や速さの変化を実際に試しながら理解できるよう、活動内容を段階的に構成した。
活動空間については、個別に音を試したり、グループで音を合わせるたり、全体で表現したりと分けることで、発達段階や活動内容に応じた関わりが生まれるよう工夫した。また、友達同士や異年齢で音を聴き合える環境を整えることで、多様な音への気づきや相互作用が自然に生まれるよう配慮した。
加えて、日常的にグループごとの演奏を互いに聴き合う機会を設け、自分の表現を安心して発信できる環境づくりを行った。
専門講師と保育者は、子どもたちの反応や興味の変化を継続的に観察しながら、使用する楽器や活動の展開を柔軟に調整し、探究が継続的に深まるよう支援した。
さらに、２月には大ホールでの音楽発表会を実施し、多くの観客の前で演奏する機会を設けた。これにより、子ども達が目的意識を持って活動に取り組み、達成感や自己肯定感につながる成功体験を得られるようにした。

**活動中の子供の姿・声、子供同士や教諭との関わり**

活動の中で、子どもたちは楽器の音に強い興味を示し、自ら音を出して試すが多く見られた。
当初は「どんな音がするのかな」と繰り返し音を出しながら、音の違いや特徴に気づく姿が中心であったが、活動を重ねる中で、「もっと強くやってみよう」「一緒にやると楽しいね」といった発言が生まれ、音の強弱やリズム、他者との関わりを意識するようになっていった。
合奏活動においては、・友達の音に耳を傾けようとする姿・自分の音を調整しながら合わせようとする姿が見られ、協働的な活動へと発展した。特に年長児では、「威風堂々」の難しい合奏曲に挑戦することで、「ここはそろえた方がいい」など、より良い演奏を目指して自ら考え、試行錯誤する姿が見られ、表現の質を高めようとする意識が育っていた。保育者は、「どうしたらいい音になるか」「今の音はどうだったか」といった問いかけを行い、子ども自身が考え、気づくことを大切にした関わりを行った。また、一人ひとりの表現や工夫を認める声掛けを行うことで、自己肯定感を育み、子どもたちが自信を持って音楽活動に取り組む姿につながった。

4.活動写真

**5．振り返り**

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

本活動を通して、音楽に触れる経験の積み重ねが、子どもたちの想像力を豊かに育むとともに、主体的に表現する力の向上につながっていることが確認できた。年少時より継続して音やリズムに親しむことで、子どもたちは「どんな音にしたいか」「どう表現したいか」といったイメージを持ちながら活動に取り組むようになり、進級するごとにその表現はより具体的かつ高度なものへと発展していった。その結果、年長児においては難易度の高い楽曲にも主体的に挑戦する姿が見られるようになった。また、2月の音楽発表会に向けた取り組みでは、「よりよい演奏にしたい」という思いのもと、子どもたち自身が試行錯誤を重ねる姿が見られた。本番での成功体験は大きな自信につながり、音楽的な表現力だけでなく、「最後までやり切る力」や達成感を得ることにもつながったと考えられる。さらに、本活動は子どもだけでなく、職員にとっても音楽指導を見直す機会となり、専門講師の指導を通して保育者の指導力向上にもつながった。今後も継続的に連携を図りながら、より質の高い音楽活動の実践を目指していく必要がある。以上のことから、本活動は音楽を通して子どもたちの想像力を基盤とした表現の広がりを促すとともに、主体性や協働性、やり遂げる力の育成にも寄与する有効な取り組みであったといえる。今後も子どもたちが楽しみながら成長していく姿を大切にし、活動のさらなる充実を図りながら継続・発展させていきたい。